

## 1 問題の所在

社会科は、公民的資質、言い換えれば、社会の中で“人（社会人）”として生きる力を育てる教科である。

社会科の教科目標に示されている公民的資質とは、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者、即ち市民・国民として行動する上で必要とされる資質を意味している。

「小学校学習指導要領解説社会編」では、「公民的資質は、平和で民主的な国家・社会の形成者としての自覚をもち、自他の人格を互いに尊重し合うこと、社会的義務や責任を果たそうとすること、社会生活の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりすることなどの態度や能力である」と例示されている。

公民的資質の育成は、選挙権が18歳になることもありますます重要なものとなっている。

小学校の社会科では、公民的資質の基礎を養うことが重要になる。そのためには、一つの社会的事象にもさまざまな見方や考え方があることをまず知ることである。そして、学習内容を社会生活の様々な場面と結びつけて多面的に考えたり、自分なりの根拠をもって判断したりする学習経験を積むことである。

アクティブ・ラーニングの重要性が言われるが、社会的事象について自ら問題意識を持ち、その問題解決に向けて自ら調べ、それを発表・交流する学習活動などを通して、社会的な思考力、判断力等を育成することが求められているといえよう。

しかし、公民的資質の基礎である社会的な思考力、判断力等に関して、現任校で一昨年度担任した5年生の4月当初の実態からは、次のような課題がみられた。

- ・年度当初、社会科の初めての授業の前に学級(32人)を対象に実施した質問調査では、「社会科はどのような教科だと思いますか」という設問に対して、児童の約6割が「覚える教科」と回答していることから、社会科を「暗記教科」ととらえている児童が多くいる。

- ・授業中の発言やワークシートに書かれた内容を見ると、自分の考えを全く書けない児童が約1割、調べたことをもとに考えることができない児童が約4割いる。

以上のような児童の実態から、指導内容の見直しや教材の工夫、指導方法の改善等に取り組み、児童に、社会的な思考力、判断力などの公民的資質の基礎を養おうと考えた。

## 2 研究の目的

小学校社会科の授業において、社会的な思考力、判断力を育成するための効果的な指導の在り方を究明する。

## 3 研究の仮説

小学校社会科では、思考力、判断力を「社会的事象の特色や相互の関連、意味を考える力」としている。具体的には児童がもっている知識や資料活用等で得た情報をもとに「比較」「関連」「総合」「再構成」などの思考方法を駆使して学習問題を追及・解決するために考える力である。

この力は、暗記で得られるものではない。「社会科は覚える教科」ととらえている児童が6割いるという実態は、学習内容を覚えることも大切だが、それよりも自分で課題(問題)を見つけ解決するという学習がより大切であることが児童に十分意識されていないことを示している。さらに自分の考えを書けない児童や調べたことをもとに考えることができない児童が少なからずいることは、こういった力を付ける学習(授業)や指導・支援が、これまで十分でなかったことを示している。

ところで、思考力、判断力等を育成する上で、学習課題を児童にとって解決したい切実なものにとらえさせ、学習過程を問題解決型にすること、自分たちの課題を協力して調べたりそれを発表・交流したりする学習活動を設定することなどの有効性がいわれている。

しかし、調べ学習を十分に行うには、高学年では、扱う学習内容・範囲が時間的・空間

的に大昔から現在、地域から国レベルに広がるので、実際に調査見学に行けないことや、調べるための図書資料等も十分でないといったハードルがある。また、個々の調べたことを互いに検討・吟味しないと「自分の考え」がもてないで調べたことをまる写しすることが学習であるような錯覚を生んでしまう恐れがある。

これらの問題点を克服する手段として、ICTの活用を考えた。ICTは、例えば、図書資料だと何十冊も用意しないと行けないが、1台のTPCがあれば自分の課題解決に向けて検索した資料や動画資料を活用して調べることができる、遠隔地にいる方にもSkypeを活用してインタビューができる良さがある。さらに、互いに調べたことを持ち寄って検討する際にもこれまでのノートや黒板に比べて利便で効率的であるなどの利点がある。自分の学習課題（問題）を追求・解決していくためにICTをうまく活用すれば、児童の社会的事象に対する理解や考えを深めたり、自分の考えを検証していく力を身に付けたりできるのではないかと考え次のような仮説を立てた。

社会科において、社会的な思考力、判断力等を育成するには、ICTを活用して授業（指導・支援等）を工夫することが有効である

このような実践研究は先行研究や事例としても、まだまだ少ない。第5学年、第6学年の社会科において、ICTの効果的な活用に焦点を当てて実践的研究に取り組むことにした。

## 4 研究の内容・方法

### (1) ICTの活用についての基本的な考え方

- 児童の社会的な思考力、判断力を養うためのツールとして、ICTの活用を考える。従って、ICTの活用は、手段であって目的ではない。子どもたちが学力を身に付けることが目的なので、研究が、「ICTの活用」自体が目的とならないようにする。
- ICTのよさの一つに、資料を拡大したり加

工したりできることがある。またskypeや聞き取りの動画資料など、情報収集する際のツールとしても優れている。このようなICTの特長をふまえた授業展開・場を考える。

### (2) 問題解決学習の設定とICTの位置付け

本授業では、つかむ（問い）→調べる（新たな問い）→考える→ひろめるといった問題解決型の学習の流れを基本的な学習過程とし、個別に考える、協働で学習するといった場、ICTの活用場面の位置付けを明確にするようにした。

#### ▽学習の流れ

各段階で、次のように、ICTを位置付けた。

【つかむ場面】IWB（インタラクティブ・ホワイトボード、以下同じ）を活用する。

【調べる場面】タブレットパソコン（TPC、以下同じ）グループで協働学習を進めて学び合う。さらにIWBを活用して、調べた内容を共有し、課題解決に導く。

【考える場面】タブレットPCのデジタル資料をもとに考えていく。また、考えたことを検証するためにSkypeを活用し、さらに理解を深め、社会的な思考力、判断力を養う。

【ひろめる場面】IWBを活用して、全体で学習をまとめ、一人一人が学習を振り返り、次時への学習につなげていく。

### (3) 検証方法

検証授業を実施し、授業における児童の言動（VTR等）、ノート・ワークシート、感想やアンケート、学習の制作物、聞き取り等からICTの活用の効果について検討する。

## 5 検証授業およびその結果

(1) 期間 平成25年5月～27年3月

(2) 対象 大阪市立堀江小学校 第5学年・第6学年（男17名、女15名 計32名）  
2年間持ち上がりの学級である。

(3) 担任 男（教職経験6年目）

(4) 検証授業の教科 社会科

本校で行った社会科の研究実践のうち、2事例の一部を次に記載する。

①第5学年「わたしたちの暮らしを支える情報」

②第6学年「新しい日本へのあゆみ」

#### (4) 検証授業①

第5学年「わたしたちの暮らしを支える情報」

(全16時間中 第7, 8時)

##### ア 本単元の学習内容等

私たちは日常生活の中で多くの情報に囲まれている。ここでは、まず、それらの情報によって生活が支えられていること、情報の発信者としてテレビ局や新聞社で働く人々は、伝える上でどのようなことを大切に、工夫しているのかを考える。次に、情報の受け手側として、阪神大震災の時に被災者はどのようにして情報を得たのかを学習し、災害時にはどのような情報が必要かについて考える。それらの学習を受けて、本実践で「東日本大震災と情報」を取り上げ、災害時に情報が人々にどのような影響を与えたのか等について自分の課題をもち調べるができるようにする。

教材として、石巻日日新聞が震災直後に実際に発行した手書きの壁新聞を準備する。調べる場面でTPCを活用する。そして、停電と津波により社屋が浸水しながらも、新聞社の人々が手書きの壁新聞を発行したときの思いや願いについて自分なりに予想させ、skypeを利用して当時の記者の考えを確かめるようにする。

##### イ 授業の実際（授業記録から）

＜つかむ場面＞ T:教師 C:児童

IWBに東日本大震災直後の画像を映しだし、その被害状況や悲惨さを捉えさせた。

(IWBに「2011年3月11日午後2時46分18秒」と映す。)

T:何の日でしょう？

C:東日本大震災の日。

(震災直後の被害の様子の画像を映し出す。)

C:建物がたくさん崩れている。

C:船がある。津波の影響だ。

C:瓦礫の中にも人がいるのかな？

C:こんな状況の中、人々はどうやって情報を得たのだろう？

前時に阪神大震災の直後、被災者がどのように情報を受け取ったのかについて学習していたので、情報の入手の仕方について注目した児童が多かった。

さらに実物大の壁新聞を提示し、石巻日日新聞が書いた壁新聞について紹介した。

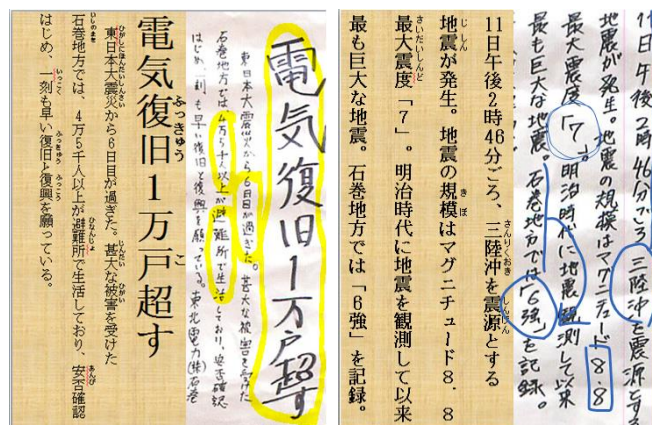
C:どんなことが書いているのだろう？

C:第1号って書いてあるけど、壁新聞ってこの先も発行されたの？

児童の問いに対して、第6号まで発行されたことを伝え、さまざまな疑問について、第1号を調べる児童と第6号を調べる児童に分かれて自分の疑問を調べる活動を行った。

##### ＜調べる場面＞

TPCを活用した。PowerPointに第1号と第6号の壁新聞の記事を貼り付けたものをデジタル資料として児童に配付した。



##### ▲デジタル資料として配布した壁新聞

調べたことを全体で交流する際には、TPCで得た資料を児童自らがIWBに映しだし、どの資料からどんなことが分かったかを発表した。友達の発表に関して質疑応答の機会を設けて、互いに共有できるようにした。

また、調べる際にペンツールで調べた内容に印をつけておくことで、より内容を共有しやすくできるようにした。



▲壁新聞の内容を友達と共有している場面

第1号（12日）

- ・地震の規模（巨大）
- ・火災（全焼）
- ・倒壊
- ・津波→水没
- ・犠牲者増える  
（行方不明）
- ・炊き出し 呼びかけ
- ・正確な情報で行動を！

第6号（17日）

- ・復旧（電気、明かり）
- ・瓦礫の撤去作業
- ・給水車
- ・安否確認
- ・人命救助
- ・医療提供
- ・喜ぶ 希望
- ・授業再開したい。

▲児童が壁新聞から読み取った内容

壁新聞に書いている内容を第1号と第6号を比較する中で、児童はその変化に気付いた。

これらの気付きをもとに、次に新聞社の人の思いを考えるようにした。

C：第1号と比べて第6号は安心できる言葉になっているよ。

C：本当だ。嬉しい情報がたくさんある。

C：内容も具体的だ。

T：どうしてこんな風に変化したのかな？

C：復旧してきたのかな？

C：みんなに元気になってほしいんじゃないかな？

T：なるほど。では、石巻日日新聞の記者の人はどんな思いで壁新聞を書いたのかな？

<調べる場面>

壁新聞の内容をもとに記者の思いを考えた。

C：第1号では早く情報を伝え、市民の役に立ちたいと思ったと思います。

C：早く伝えるだけでなく、安全に行動してほしいので、正確な情報を送りたいかっただと思います。

C：第6号では、「復旧」や「瓦礫の撤去作業」などという言葉から、人々を元気づけようとしたのだと思います。

C：第6号では、「人命救助」や「医療提供」など町の取り組み詩を知らせ、みんなががんばっていこうと伝えたかっただと思います。

〔Skype の活用〕

記者はどんな思いで記事を書いたのか、児童が自分の予想を確かめることができるように、skype を活用して実際に石巻日日新聞社の当時の記者の方に聞く場を設けた。

G(記者)：記者たちが取材してきた情報は、「あの町もこの町も壊滅」など残念な情報しか入ってきませんでした。このまま避難所にいる人たちに伝えたら、読む人たちの心が潰れてしまうのではないかと心配になりました。そこで、2日目からは、読む人たちに希望を持ってもらう情報を優先的に壁新聞に載せるようにしました。

C：壁新聞はどこで書いたのですか？

G：会社の中にも津波が入ってきていました。津波が引いた後、ヘドローを社内から外に出して、ダンボールを敷いて、その上に机を出して、そこで手書きの壁新聞を書き続けました。

C：災害の中、どうやって情報を手に入れたのですか？

G：私たちの町は瓦礫と化してしまいました。それでも、記者たちはゴミ袋を足に巻いて、瓦礫の中を歩きながら、写真を撮り、取材していました。

C：第6号を書き終えて、印刷機が復旧し、印刷できるようになったときはどんな気持ちでしたか？



G：本当に嬉しかったです。記者の中には、刷り上ったばかりの新聞を手にして、インクのにおいを嗅いでいる人もいました。



#### ▲SKYPEで新聞社の方に質問している場面

#### ウ 検証授業①の結果と考察

##### ○ 授業記録（ビデオ）や資料等から

- つかむ場面で IWB を用いて大震災の被害の映像を映し出したことにより、児童は被害の状況や悲惨さをある程度まで捉えることができたことがワークシート等から分かった。デジタル資料は視覚的に分かりやすいことがあげられる。更に「人々はどうやって情報を得たのだろう」という疑問を持つことができ、調べたいという学習意欲に繋がった。
- ・ これまでなかなか自分の考えがもてず書けなかった児童が、調べたことと自分の考えを説明することができた。全体でもその内容を共有できた。これは、教師の個別のアドバイスと児童が調べた内容を発表する際に資料のTPCの画像を IWB で鮮明に大きく映すことができたことが大きい。また、自分が強調したい文を拡大して映し出す児童もいた。
- ・ 石巻日日新聞社の記者へのインタビューでは、児童は最初は戸惑っていたものの、skypeを通して、疑問に感じたことを記者の方にはたくさん質問し、情報の送り手側の思いや災害時の情報の重要性等が理解できた。これは、疑問に感じたことを、skypeを活用してその場で当事者に質問できた効果であると考ええる。

##### ○ 児童の感想から

授業後の感想（ワークシート）では、無記入の児童はおらず各自が意見や感想を書いていた。

記述内容をみると「直接質問などをするによって、実際分からなかったことが詳しく分かった」や「送り手は私が思っていた以上に熱い思いで書いていた。直接話をして、送り手の思いがよく分かった。」など「よく分かった」の記述が7割以上見られた。直接やりとりすることで理解が深まったと言える。

「送り手は読む人のことを考え、書いていることが分かりました。『希望』や『復興』などの言葉を書くと、人々は安心して復興を期待できると思いました。」と、送り手が受け手を意識し考えて、情報を発信していることの理解に関する記述も児童の5割以上に見られた。

「新聞社の人の行動に感動しました。自分もまだまだ復興されていない被災地に励ましの手紙を送るなど、自分ができることを考えて行動したいです。」という社会貢献意識の高まりが見られる感想を書く児童も約3割いた。

以上から児童一人一人が自分の考えをもち、理解を深めることができたといえる。

#### 【検証授業 ②】

第6学年「新しい日本へのあゆみ」

（全5時間中 第1時）

#### ア 本単元の学習内容等

本単元では、日本が敗戦から新しく民主国家として出発し、経済を復興させ、“敗戦国”から脱却し、国際的に地位を向上させたことを理解できるようにする。

単元の導入で、2020年と1964年の東京オリンピックの開催を取り上げる。ここでは、IWBで動画等の資料を活用できるようにする。

50年前の東京オリンピックの様子について、準備したTBの資料をもとにグループで分担して調べていく（ジグソー法）。戦後20年足らずで開催できた理由について予想し、互いの意見を交流する中で、「内政」「外交」「産業」の変化に気づくことができるようにする。そして、戦後から今日につながる日本の歩みについて、さらに調べたい課題を持てるようにする。

## イ 授業の実際（授業記録から）

### ＜つかむ場面＞

2020 年開催予定の東京オリンピックの動画を見て、その後 1964 年の東京オリンピックの画像を見て、50 年前にも東京でオリンピックが開催されたことを知り、興味をもてるようにした。

T：今からある動画を映します。知っていることや気付いたことをつぶやいてみましょう。  
(IWBで東京オリンピック開催決定の瞬間の動画を映し出す。)

C：東京オリンピックが 2020 年に行われる。

C：お・も・て・な・し。

C：どんな種目が行われるのかな？

T：では、次はどうか？

(IWBに 1964 年の東京オリンピック開幕式の画像を映し出す。)

C：昔のオリンピック？

C：分かった。50 年前のオリンピックの様子だ。

C：どんなオリンピックだったのかな？

T：では、これを見てみましょう。

(IWBに戦後すぐの東京と東京オリンピックの写真を比較して提示する。)

C：すごく変わったね。

C：19 年でここまで復興したんだ。

C：この間にどんなことがあったのかな？



### ▲戦後すぐの東京と 1964 年のオリンピック会場 ＜調べる場面＞

50 年前の東京オリンピックの様子について、調べる活動では、ジグソー法を取り入れた。

資料として作成・準備したのは、

A「東京オリンピックが開催されるまで」

B「オリンピックの参加国や競技など」

C「当時の人々の暮らし」

D「当時を経験した人の話」

の 4 つである。

これらを 4 人グループで役割分担して調べていくことにした。

A「東京オリンピックが開催されるまで」は 1964 年の東京オリンピックが開催されるまでの様子についてのニュース番組の一部分を活用した動画資料である。この動画資料からは、日本が戦後まもなくオリンピックを誘致し、それに向けて、首都高速道路や新幹線を開通させたことなど日本の技術が進歩したことが分かる。

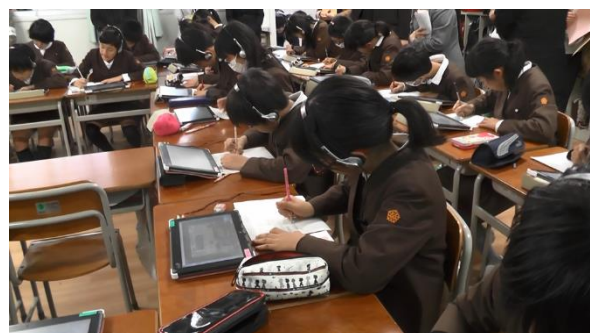
B「オリンピックの参加国や競技など」は、PowerPoint にオリンピックの概要や参加国の資料を貼り付けたものである。特に参加国に目を向けさせ、その数の多さや戦争をしていた国も参加していることに気付くことができるように意図して作成した。

C「当時の人々の暮らし」は、「3 種の神器」と呼ばれる白黒テレビ、電気冷蔵庫、電気洗濯機について解説した資料である。それらが家庭に普及し、人々の暮らしが豊かになっていったことが分かるように PowerPoint に貼り付け、カラーで見られるようにした。

D「当時を経験した人の話」は、オリンピックが開催された頃に、東京にいた方に当時の街の様子や人々の暮らしについて聞き取りを行った動画資料である。経済が発展し、大きな建物がたくさん建ったり、テレビでオリンピックを観戦したり、戦後貧しかった人々の暮らしが豊かになっていったことが分かる資料である。

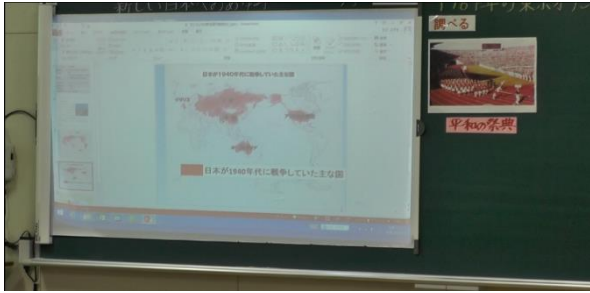
これらの動画資料を調べていく児童には、ヘッドセットを使用させた。

### ▼動画資料を調べている場面



調べたことを交流する際は、検証授業①同様、資料を児童自らが IWB に映しだし、どの資料からどんなことが分かったかを全体で共有できるようにした。

児童の発言を板書する際は、「内政」「外交」「産業」に分けて板書し、考える場面につなげられるようにした。



▲IWBにTPCの画面を映し全体共有している場面

T：日本は1964年に盛大なオリンピックを開催することができたのですね。(教室に掲示していた焼け野原の様子の写真や、やみ市の様子写真を指しながら)19年前はこんな状態だったのね。

C：日本は本当にすごい国。

C：みんなの願いが叶ったんだね。

T：こんな短期間でどうして開催することができたのでしょうか？日本がどんな国になったからかな？

### ＜考える場面＞

調べた内容をもとに、「開催できたのは、日本がどんな国になったからか」を考えた。

C：平和な国になったからだと思います。戦争していた国も参加しているからです。

C：戦争をしない国になったからだと思います。戦争で苦しんだ人々が「二度と戦争はしない」と誓ったのです。

C：豊かな国になったからです。東海道新幹線や首都高速道路ができたからです。

C：そういった技術の進歩が、外国からも認められたのだと思います。日本が急成長を遂げたことに外国も驚いたと思います。

児童から出てきた意見を、それぞれ「内政」、「外交」、「産業」に関することに分けて板書し、それらを項目ごとに囲いながら、全体をみて考えを交流させた。次のような意見が出されて調べたことを全体としてまとめ総合的にみることができた。

C：〇〇さんの意見と同じで、日本は日本の国自体も変わったと思う。それから外国とも仲良くなったり認められたりした。技術もとても進歩していった。だからオリンピックを開催できたと思います。

### ＜ひろめる場面＞

T：1945年から1964年の間、実際どんなことがあったのかな？どんなことを調べてみたいですか？

C：白黒テレビや電気冷蔵庫、電気洗濯機以外にどんなものが発展したのかを調べてみたい。

C：平和な国になるには、今までと違う何か決まりができたのかな？

C：憲法ができたんだよ。

C：外国とはどうやって仲良くなったのかな？

C：中国が参加しなかったのはなぜだろう？

T：では、次の社会科の時間からそれを調べていきましょうね。

### ウ 検証授業②の結果と考察

#### ○ 授業記録等から

- ・ つかむ場面でIWBを用いて、2020年の東京オリンピック開催決定の瞬間の動画や、1964年の東京オリンピックの画像について、児童はひきつけられるように見て様々なつぶやきをした。オリンピックについて調べたいという意欲を高まったことがみてとれた。また、戦後すぐの東京の様子とオリンピックの様子を比較して提示することにより、「すごく変わった」等の意見に象徴されるように、19年の間にどんなことがあったのかを調べたいという学習意欲も高めることができた。
- ・ 調べる場面で動画資料を活用することにより、調べる活動が得意でない児童もワークシートの記述量が増えるなど意欲的に取り組めた。また、事前に聞き取っておいた動画を編集しておくことで、児童は短い時間で効率的に聞き取りの学習を行うことができた。
- ・ オリンピックの様子や当時の人々など、様々な角度から調べ活動を行い、それをグループや全体で共有することにより、東京オリンピックの特色について複数の情報を関連づけて考えることができた。

#### ○ 児童の感想から

授業後の感想では、「日本が19年でここまで復興したことに驚きました。東京オリンピック

のころの映像はとてにぎやかで、みんなうれしかったのだと思いました。」と書いている児童がいた。動画資料により、オリンピックの華やかさが分かり、理解に繋がった。

「戦争をしていた国も（オリンピックに）参加しているのがすごいと思いました。日本もアジアを攻めてひどいことをしてきたのに、どうやって信頼を回復していったのが気になりました。」と、その19年の間に何が起こったのかを調べたいという学習意欲につながった。

「(動画資料を見て)当時の人々の様子がよく分かりました。友だちが新幹線や白黒テレビなどを教えてくれて、戦後すぐの人々の暮らしと全然違うなと思いました。これだけ復興できたのは、当時の人々は強い心を持っていたからだと思います。」と書いている児童もいた。社会的事象の相互の関連を考えられていると言える。

## エ ICTの活用に関する質問紙調査から

タブレットや電子黒板を使った社会科の授業について、「楽しい」「分かりやすい」「もっとしたい」の項目を設け4段階の評定尺度で尋ねた。

### ▼タブレットや電子黒板を使った授業は

	思う	すこし	あまり	思わない
楽しい	81.3	18.7	0.0	0.0
分かりやすい	65.6	21.9	12.5	0.0
もっとしたい	75.0	12.5	6.3	3.2

児童全員が、タブレットや電子黒板を使った授業を「楽しい」と肯定的にとらえている。肯定的な回答は「分かりやすい」で87.5%、「もっとしたい」で87.5%であった。

## 6 研究のまとめと今後の課題

社会的な思考力や判断力の育成を目指した授業づくりに取り組み、それらの力を育成するために効果的なものとして、社会科におけるICTの活用

に焦点を当てて実践的研究を進めた。

つかむ場面でICTを活用することにより、見

ることで様々な疑問がわき、児童自らが問いを設定し、意欲的に学習に取り組むことができた。

また、調べたことを交流する際には、資料をIWBに映し出すことで内容を共有しやすくなり、学習に深まりが生まれた。さらに、skypeや動画資料などこれまでできなかったことがICTによって実現が可能となり、児童の社会的な思考力、判断力の育成につながることができた。ICTの活用という面からみた成果と課題をまとめる

と次のようになる。

### (1) 成果

ICTを適切に活用することにより、学習課題の解決への意欲が高まるとともに、社会的な見方や考え方を発揮させる場を生み出すことや、思考力・判断力の育成に効果があった。また教師自身が、ICTの活用を考えることで、授業の設計や振り返りに役立った。

### (2) 課題

検証授業①では、児童の関心が情報ではなく災害の方に行く場面があった。ICTによる映像資料の影響が大きかったとも考えられる。この点をふまえ、社会科の「わたしたちの暮らしを支える情報」の学習計画の流れや教材の提示等を再度、検討・工夫する必要がある。

検証授業②では、考える場面の問いを児童自身がなかなか作ることができなかった。児童の思考の流れを考え、ICTの活用も含め、この場面での指導・支援の工夫をさらに検討していく必要がある。

### (3) 今後に向けて

以上に述べたように、社会科の授業におけるICTの教育活用に関して、一定の効果があった。これは、問題解決学習の流れを基盤に協働学習やジグソー法などと組み合わせた成果でもあると考えている。今後、社会科での様々な単元や他の教科・領域に広げて、実践事例を積み重ね、学校や本市の教育に役立てていきたい。

### 参考・引用文献

- 1) 東洋館出版社『小学校学習指導要領 社会編』平成20年 文部科学省
- 2) 図書文化『小学校社会授業を変える5つのフォーカス』平成24年 著者 澤井陽介
- 3) 東洋館出版社『澤井陽介の社会科の授業デザイン』平成27年 著者 澤井陽介